

「森山ってさ、何か変わってるよな。男の子っぽいっていうか…。」

これは、私が小学四年生のときに、クラスの男の子から言われた言葉です。

小学生のころの私は、男の子と遊んだ方が楽しいと思っていました。女の子と話すよりも、男の子と話していた方が馬が合いました。ビーズを並べるよりも、ボールを蹴っていた方が楽しかったです。

そんな中、いつもと同じように学校で男の子と喋っているとき、不意に言われたのが、この言葉でした。「ズキッ。」

「変わっている。」この言葉は、私の胸に冷たく尖った何かを刺しました。

その言葉をクラスの人にも沢山聞いていたからか、それから私は、クラスの友達である女の子から、いじめを受けるようになりました。無視をされたり、訳もなく怒鳴られる、毎日がその繰り返しでした。

それからの私は、男の子と遊ぶことをやめ女の子と話すようにしました。いじめられないように、何とか女の子と関係をもてるように、はみ出さないように、必死でがんばりました。

そうやって、自分自身を偽っていくうちに、自分自身が、色褪せていくのを感じました。憂鬱で息苦しい日々が続く、毎日が白黒で、まるで自分の世界から、色が消えてしまったそんな気さえたのです。

しかし、そんな白黒な毎日から、私を救い出してくれた人物がいます。それは、私の母でした。ある日私は母に、

「いじめられるのがいやだから、学校を休みたい。」

と、訴えました。その時母が、

「別に、周りの目を気にして自分を変えなくても良いと思うよ。裕美は裕美なんやからさ。」

その瞬間、私の胸に刺さっていた、あの冷たく尖った何かが、解けていきました。気がつくとは、母に抱きつき、「ポロポロ」と涙を流していました。

「そうだ、周りの目なんて気にしなくていいんだ。自分のしたいことをすればいいんだ。自分らしく、生きていいんだ！」私はやっとそう思えるようになったんです。

次の日から私は、自分のしたいことをするようになりました。そうすると、自然と自分らしい口調、自分らしい仕草になっていきました。時間が経つにつれて、クラスのみんなも、そんな私を受け入れてくれるようになり、いじめも消えていました。

今では、男の子、女の子両方と遊んでいます。絵をかくことが好きになり、そのことを通じて、今では友達も沢山います。親友と呼べる存在にも出会えました。

近年、「LGBTQ」、セクシュアルマイノリティの人たちが注目されています。異性が好きな人、同性が好きな人、両性を好きになる人、産まれてきた性と、生きる性が違う人など、この世界には人それぞれの、沢山の個性があります。

その個性を、もっと自由に広げられるように、日本でも沢山の取り組みが行われています。

けれども、知識がないゆえに、「レズビアン」を「レズ」と呼んだり「ゲイ」を「ホモ」などと、差別的な用語で呼んでしまう人もいます。それに、周りとは少し違うからといって、学校や会社など色々な場所で差別を受けてしまうことも、少なくありません。

女の子だからおしとやかにしなければいけない、男の子だから人形遊びはおかしい、そんな偏見をもつのではなく、その人の個性として理解していく。このことが、人と接していくうえで、そして、これからの世界を担っていくうえで、大切なことだと思うのです。

だから私は、全ての人々が自分の個性を胸を張って見せられる、そんな世界を創っていきたくです。

「十人十色」、世界中の人たちが、この言葉を、素敵と思えるような世界にしましょう。